第22次(昭和61年度)高校教師海外研修

視察報告書

昭和 61 年 11 月

国際協力事業団

00
56
AP
RARY

広　報
JR
86－28

第22次(昭和61年度)高校教師海外研修

視察報告書

JICA LIBRARY
1005492[2]

昭和61年11月

国際協力事業団

国際協力事業団

受入月日	'87. 1. 27	000
		36
登録No.	15895	GAP

はじめに

当事業団では、わが国の開発援助に対する国際協力の現状に対する認識、理解に関する啓発事業の一環として、次代を担う青少年の国際理解と協調の精神を培うための実践を行っている全国高等学校国際教育研究協議会加盟高の教師の方々に高校生に対する指導に役立てていただくべく、昭和４０年度より海外における現場を視察いただいてまいりました。

本年度は、東南アジアに５名、中南米に４名の先生を派遣し、わが国が各国で繰り広げております技術協力、無償資金協力及び移住事業等の国際協力の現状や、訪問国の経済・社会・教育等につき、広く見聞していただきました。

今般ここに「第２２次高校教師海外研修報告書」を発行するにあたり、これが今後の国際教育の現場において資料として広く活用されることを願う次第です。

昭和６１年１１月

国際協力事業団
総務部長　田島高志

目　　次

1．視察日程
2．視察団員氏名
3．報告
＜東南アジア班＞　日程 …… 1
山形県立赤湯園芸高等学校教諭
尾　形　昭　雄 …… 3
静岡県立磐田農業高等学校教諭
小　栗　善　郎 …… 6
富山県立小杉高等学校教諭
笠　田　政太郎 …… 9
兵庫県立宝塚東高等学校教諭
田　中　三　郎 …… 11
愛媛県立伊予農業高等学校教諭
喜　安　光　男 …… 13

＜中南米班＞　日程 …… 15
東京都立園芸高等学校教諭
宮　田　智　子 …… 16
福島県立東白川農商高等学校教諭
鈴　木　吉　重 …… 19
島根県立津和野高等学校教諭
佐　堂　　博 …… 21
長崎県立西彼農業高等学校教諭
村　田　正　彦 …… 23

1．視察日程

＜東南アジア班＞

研修地	期間
東京	7月27日（日）
マニラ	27日（日）～ 31日（木）
ジャカルタ	31日（木）～8月 4日（月）
クアラルンプール	8月 4日（月）～ 8日（金）
バンコック	8日（金）～ 12日（火）
東京	12日（火）

＜中南米班＞

研修地	期間
東京	7月27日（日）
リマ	27日（日）～8月 3日（日）
サンパウロ	8月 3日（日）～ 7日（木）
イグアス	7日（木）～ 9日（土）
アスンシオン	9日（土）～ 11日（月）
リオ・デ・ジャネイロ	11日（月）～ 13日（水）
東京	15日（金）

2．視察団員氏名

＜東南アジア班＞

尾形昭雄　山形県立　赤湯園芸高等学校教諭　（農業）
小栗善郎　静岡県立　磐田農業高等学校教諭　（農業）
笠田政太郎　富山県立　小杉高等学校教諭　（農業）
田中三郎　兵庫県立　宝塚東高等学校教諭　（社会）
喜安光男　愛媛県立　伊予農業高等学校教諭　（農業）
〔同行〕熊倉晃　国際協力事業団　総務部広報課

＜中南米班＞

宮田智子　東京都立　園芸高等学校教諭　（英語）
鈴木吉重　福島県立　東白川農商高等学校教諭（社会）
佐堂博　島根県立　津和野高等学校教諭　（英語）
村田正彦　長崎県立　西彼農業高等学校教諭　（理科）

<東南アジア班>

日　　程

国　名	期　日	視　察　訪　問　先
フィリピン	7月28日（月） 午前	・フィリピン国際協力事業団事務所で打合せ。 ・アセアン人造りプロジェクト
フィリピン	7月28日（月） 午後	農村工業関連、農村開発センター（プログラムⅢ） キャビテ州、ダスマリニヤス プロジェクト方式技術協力、無償資金協力 57年9月～62年9月
	7月29日（火） 午前	・熱帯医学研究所プロジェクト マニラ南方　アラバン地区 技術協力、無償資金協力　55年10月～62年3月
	午後	・農業省畜産局種畜場 青年海外協力隊員遠藤さん（北海道出身、東京農業大卒） 牛の人工授精についての活動　　技術協力
	7月30日（水） 午前	・比工科大学総合技術訓練センタープロジェクト 技術協力、無償資金協力 57年11月～62年11月
	午後	・国際イネ研究所（I.R.R.I） ラグナ州、ロス・バニオス、フォード財団、ロックフェラー財団として1960年に設立　　技術協力
	7月31日（木） 午前	・日本大使館、情報文化センターを訪問
インドネシア	8月1日（金） 午前	・国際協力事業団インドネシア事務所にて打合せ。 ・農業開発リモートセンシング・プロジェクト（人工衛星利用） 管轄機関名：公共事業省　情報総計センター 技術協力、無償資金協力、55年4月～60年3月
	午後	・ジャカルタ日本人学校 昭和44年創設　18年目　小学部 688名（21 学級） 中学部 214名（7学級）教職員（政府派遣教員）30名
	8月2日（土） 午前	・職業訓練指導員、小規模工業普及員養成センタープロジェクト ブカシ市（ジャカルタ市より東方 30km） 技術協力、無償資金協力 58年2月～ 63年2月
	午後	・ボゴール農科大学、農工学部・大学院 昭和38年9月設立、学生数6,500 名（大学院生850 名） 教職員数 870名　7学部　　ボゴール市 受入機関：教育文化省高等教育総局 技術協力、無償資金協力 59年12月～61年3月 ・ボゴール植物園 1817年設立、面積87ha、15,000種、熱帯植物園 ジャカルタから南方に 45km
	8月3日（日） 午前 午後	・ジャカルタ市内視察 中央博物館（国立）　タマンミニインドネシア公園 バテックセンター

国　　名	期　　日	視　察　訪　問　先
マレーシア	8月5日（火） 午前	・国際協力事業団マレーシア事務所にて打合せ。 ・マレーシア農科大学　海洋水産学部拡充プロジェクト 長期専門家　川村リーダー以下5名 技術協力　59年10月～64年10月
	午後	・アセアン人造りプロジェクト 職業訓練指導員・上級技能訓練センター 長期専門家　丸山リーダー以下 16 名 技術協力、無償資金協力　57年8月～62年8月
	8月6日（水） 午前	・マレーシア林業研究所 森産研究協力プロジェクト　木材利用及び木材化学の研究協力 松本チームリーダー他3名　60年4月～65年3月
	8月7日（木） 午前	・フェルクラ公団（農業構造改善公団）〔配属〕 クアラ・ルンプールより 180㎞、セベラング州の集団農家 青年海外協力隊員森田明昭さん（兵庫県立　田島農業高校県立農業大学校卒）野菜、畑作物の栽培についての指導、現地視察
	8月8日（金） 午前	・国際協力事業団事務所訪問 クアラ・ルンプール市内視察、スズ博物館、バツー洞穴
タ　　イ	8月8日（金） 午前	・国際協力事業団タイ事務所にて打合せ
	8月9日（土） 午前	・水上マーケット：メナム川、メクロン（運河） ・バンコク市内、寺院の視察 ・ワットアルン（暁の寺）・ワットプラケオ（エメラルド寺院） ・王宮　・ワット・ポー（ねはん寺）
	午後	・ローズガーデン
	8月10日（日） 午前 午後	・バンコク郊外の農村、日本人町跡 ・アユタヤ　・バンパイン離宮
	8月11日（月） 午前	・タイ労災リハビリーテーションセンタープロジェクト 職業準備課　職業訓練課　機能回復訓練課（医療リハビリーテーション）　米川リーダー以下6名 技術協力、無償資金協力、56年10月～61年9月
	午後	・灌漑技術センター　王室かんがい局 基準の検討、水利モデル解析、建設材料試験、システム開発 プロジェクト方式技術協力 57年4月～61年3月 6名の専門家

氏　名　尾 形 昭 雄
所属学校　山形県立赤湯園芸高等学校
担当教科　農　業

1．視察等に際して特に主眼を置いた点

1）我国の国際協力事業団を通して実施している国際協力の内容について。（技術協力、無償資金協力、研修員の受入、専門家の派遣、青年海外協力隊員の活躍など）
2）アセアン諸国の産業構造、生産物、及び我国に対する農産物の輸入品目と量について。
3）各国で栽培している農作物の種類と栽培技術について。
4）青年海外協力隊員の職種と活動状況について。

2．国際協力の現場で

1）参考になった事
①我国の海外協力の事業が国際協力事業団を通して、種々の分野にわたり予想以上に技術協力、資金援助がなされており認識を新たにした。
②各国とも限られた範囲の視察ではあるが、産業、経済、社会、教育等の現状が理解でき、国際的視野を広げることができた。若い者の教育に生かすことができ有意義であった。
2）気になった事
①日本での最先端をいく機械や専門家による技術指導の援助で運営しているが、専門家の派遣期間が終了すれば、自国の技術者が機械を活用し指導ができるのか。
②専門家を派遣し、プロジェクト方式技術協力など業務を行っているが、専門家達が自分の専門をどの程度生かすことができるのか疑問をもった。
3）我が国の協力振りを各方面に紹介すべきだと考えられるプロジェクト
a）プロジェクト名　　b）その理由
①フィリピン：熱帯医学研究所：現在でも死亡率の高い熱帯に発生する伝染病や狂犬病の入院患者が多い中で、長期専門家として滞在し活躍している金子先生を世界に紹介したい。
②インドネシア：農業開発リモートセンシング：リモートセンシング技術を応用して、農業開発の適地選定技術に生かしており、最先端技術の農業上利用で大変参考になる。
③マレーシア：マレーシア林業研究所：日本の資源が貧しく、近い東南アジアに求めており、熱帯樹木の利用法について研究を深めており、世界の先端をいく研究を紹介したい。

④タ　　イ：タイ労災リハビリーテーションセンター：労働災害が増加している現状から機能回復訓練につとめ職場復帰のため頑張っている姿は、健康な者に対するいましめとなる。

3．今後の教育指導に生かす具体的方策、もしくは材料として考えていること

今度の視察研修した内容を、教科、科目、学校行事、クラブ活動等の教材として生かし、高等学校における国際理解、国際協調の精神を培うために努める。
①国際協力事業団が実施している種々の国際協力の現場からいただいた資料。
②国際協力の現場、農業の状況、社会の状況、熱帯植物についての写真、スライドを編集する。
③東南アジアを歴訪しての報告会「見たり、聞いたり、感じたり」について高国教加盟校で開催する。

4．所感及び意見

1）研修時期及び期間
①時期：現在実施している7月下旬～8月上旬は夏休期間中であり、適切である。
②期間：事前指導を含めて20日間で適当である。

2）研修日程及び訪問先
①日程：今年度の1箇国4日間、1日の内容についても適当である。
②訪問先：開発途上国4箇国で適切である。訪問先については、今年度の各国アセアン人造りの同じ内容のものがフィリピン、インドネシア、マレーシアにあった。60年度に訪問したインドネシア農業計画中央食用作物研究所のように農作物の栽培試験研究所も入れた方がよいと思われる。

3）その他（手続き・他）
国際協力事業団をはじめ、高国教、関係機関の周到な計画のもとに、各国の支部長、現地の方々の懇切な案内によりまして予期以上の成果をおさめることができました。厚くお礼申し上げます。

5．その他（御意見があれば）

①人選について、推せん者の書類提出後、本部において適任者を最終決定することになっておりましたが、本人に対して決定通知がおそく、旅行手続きや準備の都合があるのでできるだけ早く

本人に知らせてほしい（各県共教員の海外旅行については県教育委員会に１箇月前に申請しなければなりません）

②事前指導について、今年度は出発２日前に設定していただきましたが少なくとも出発２週間前に全員一同に会し、顔合せも兼ねて、準備するもの、訪問先の状況、心がまえなど指導していただけば安心して計画を立てることができると思います。経費がかかる場合は個人持で結構です。（今年度は状況がわからず、出発前まで家族共々不安でした。）

氏　名　小 栗 善 郎

所属学校　静岡県立磐田農業高等学校

担当教科　農業（造園）

1．視察等に際して特に主眼を置いた点

1）国際協力事業団の具体的事業内容と協力資金額

2）国際協力事業団職員および派遣者の現地における生活

3）東南アジア諸国における都市緑化の現況、住宅庭園の様式、熱帯樹木の種類

2．国際協力の現場で

1）参考になったこと

a）貧富の差が激しく下層階級の人たちに対しては我々個人が微力ながらも手助けしなければならないと痛感した。

b）JICA職員はじめ専門家、派遣員、隊員の皆様が日本人の代表として誇りをもちながら活躍されていること。

c）JICAの事業内容が現地を見て改めて良く解った。

d）現地での説明を聞きながら日本の事（身の回りのこと）についてもっと知る事の必要性を痛感した。

2）気になったこと

a）派遣員の子弟の教育、生活上の不便さ

b）帰国後の日本の社会への順応がスムーズに出来るか

c）自立可能な国に依存心を植え付けてはいないか

d）日本人指導者の任期終了後、施設設備が十分に使いこなせるか

3）わが国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられるプロジェクト

a）プロジェクト名

青年海外協力隊事業

b）その理由

マレイシアにおいて森田隊員が真っ黒になって農作業に従事し、現地の言葉を使い、現地の作業員・子供達に現地の言葉をつかって指示をだし、衣食住すべて現地の人になりきっている姿を見て感動した。

3．今後の教育指導に生かす具体的方策、もしくは材料として考えていること

1）静岡県高校生海外教育セミナーにおいて講演
2）静岡県高等学校国際教育研究協議会において研修報告
3）静岡県高等学校農業教育振興会および静岡県高等学校農業教育研究協議会会誌に研修内容の掲載
4）静岡県立磐田農業高等学校内における報告会及び各種授業において教材として取り入れる
5）静岡県立磐田農業高等学校緑友会（造園科OBによる組織）の会報へ記事掲載

4．所感及び意見

1）研修時期及び期間
a）日本の夏と合致して居てよかった（持ち物など）
b）当初は17日間は長いと思ったが今になればちょうどよい期間である

2）　研修日程及び訪問先
a）各国毎の詳しい日程及び訪問先が出発前にわかるとよい（事前研究がしやすい）
b）各国毎の訪問先が事前に調整できないものか（人造りプロジェクトに内容の重複があった）
c）各国においてJICA事業を一巡したあと自由研修日が一日とれると個別研修が更に充実する
（農業分野は範囲が広いため各専門毎に更に深く研修したいこともあり、市内一巡後訪問して見たい場所もある。小生の場合は、造園、都市緑化、樹木に関して勉強したいことが沢山あった）

3）　その他（手続き・他）
a）学校、県への届けをだす関係上、7月10日頃には詳細が確定して欲しい
b）ブリーフィングは直前でなく一週間程度前に実施されたほうがよい（メンバー同士の事前打ち合わせ、持ち物等の諸準備の関係）
c）参加者は訪問国及び訪問先の事を十分に事前研究をしておくべきである

5．その他（意見があれば）

1）JICA広報課及び各国事務所の皆様には大変お世話になり心より感謝申し上げます。熊倉様には通訳、雑務などで特別にご迷惑をおかけしたことと思います。有難うございました。

2）　各国とも移動用の車を手配して頂き、個人負担が軽減でき助かりました。

3）　参加者の選定は各県とも海外教育多年従事者を優先している様であるが、これから海外教育に取り組もうとする若い教員を参加させたほうが海外理解教育の発展性が期待できると思う。

（外国を知った上で海外理解教育をすべきである）

氏　名　笠　田　政太郎
所属学校　富山県立小杉高等学校
担当教科　農業

1．視察等に際して特に主眼を置いた点

1）JICAの国際協力事業を理解する。
2）各国の農業事情について知る事。
3）アセアン各国の生活と文化の比較。

2．国際協力の現場で

1）参考になった事
人材養成のしくみが日本と異なっていること（多くのカウンターパートの存在協力相手国の意見がかなりとり入れられている事などを知ったこと。）

2）気になった事
いくつかのプロジェクトでの施設設備が後々までうまく利用されていくのか心配なところもあった。

3）我が国の協力振りを各方面に紹介すべきだと考えられるプロジェクト
a）プロジェクト名
タイ労災リハビリセンターのIRCプロジェクト
b）その理由
労働災害をうけた人達、いわゆる弱者救済のプロジェクトであり、専門的でわかりにくい技術協力が多い中で、一般の人々にもわかりやすく、共感の得やすいプロジャクトであると思われる。

3．今後の教育指導に生かす具体的方策、もしくは材料として考えていること

青年海外協力隊員の活動を広く高校生に紹介していきたい。

4．所感及び意見

1）研修時期及び期間

適当であった。

2）研修日程及び訪問先

適当であった。

3）その他（手続き・他）

最終決定を少し早めにしてもらって事前学習の時間があればよかった。

5．その他（御意見があれば）

青年海外協力隊員（遠藤、森田両隊員）の若々しい澄んだ瞳が特に印象に残った。青年海外協力隊事業は、国際協力事業であると同時に日本の青少年の国際理解、国際性を身につける最も重要な事業であり、多くの青少年を参加させ将来の日本を担う国際人を養成する事業としても位置づけられる様、望みたい。

各国でJICAの現地事務所の職員の方々の温かいお世話になり、本当にありがとうございました。又、同行していただいた広報課の熊倉課長代理にも大変な御心配、御迷惑をおかけし、御礼の申し上げようもありません。

各地でJICAの職員の方々の献身的な活動をみるにつけ、敬服しておりました。国際協力で大切なことは人であるとどなたかが書いておられましたが、もっとJICAの職員の数を増やしてより効果的な国際協力事業を進められます様期待します。

各国の都市のスラムの予想どおりのひどさと対象的にゆとりある農村風景に驚き、安心した。開発、工業化を進めるときに、その国の良さを残す事も大切であり、日本の国が失ってしまったものが東南アジアの各国の農村にあるような気がした。緑と物質的にはなくとも、精神的なゆとりのある生活、日本が見習らうべき点であると思いました。

氏　　名　　田 中 三 朗

所属学校　　兵庫県立宝塚東高等学校

担当教科　　社会科（政治、経済：現代社会）

1．視察等に際して特に主眼を置いた点

1）東南アジア地域、アセアン諸国の実質的生活水準、文化レベル、宗教、文化、芸術、風俗習慣等における民族的独自性について

2）日本の工業製品の普及度の実態
日本人、日本文化への現地国民（一般庶民）の理解度

3）現地国民の対日感情、在留日本人の生活形態と活動情況、精神生活の内容

4）日本の経済・技術援助の実効性とその限界

2．国際協力の現場で

1）参考になった事

“百聞は一見に如かず”というが、現地のことは現地に臨まねば肌で感じて身体で分ることは無理であることを感じた。現地の気候、風物、途上国一般庶民の生活実態日本の経済・技術援助の現実を見ることができた。各国でJICA事務所を訪問視察でき、職員の献身的な努力の姿勢を垣間見ることができた。開発教育の普及徹底をはかる必要を痛感し教育の重要テーマであると思った。

2）気になった事

①先進国経済の急角度的効率的発展と途上国経済との格差

②途上国での資本蓄積→工業化→自立化コースの早期達成の可能性

③途上国の自力更生、自助努力に関連して、教育向上への全面的援助なしには途上国の発展・向上は極めて困難ではないだろうかということ。

3）我が国の協力振りを各方面に紹介すべきだと考えられるプロジェクト

a）プロジェクト名	①フィリピン		熱帯医学研究所
	②インドネシア		農業開発リモートセンシング
	③マレイシア	㋑	国立マレイシア農科大学水産学部
		㋺	青年協力隊員の農業指導（野菜作り）
	④タイ王国		タイ労災リハビリテーションセンター

b）その理由

発展途上国の貧困からの脱却と向上に資する人道的見地からの援助であり、日本の国益を守るバックグランドを構築することに遠くでは繋がっていると思う。

3．今後の教育指導に生かす具体的方策、もしくは材料として考えていること。

外務省・JICAからの各種情報・広報パンフレット類を多数募集し、今回の現地見聞を裏打ちにして、政治・経済、現代社会の授業時に活用したい。今回の旅行で途上国でのJICAの活動情況を伝える地図、総計、数表図版等を入手できたので、自ら撮影できた１，０００枚に近いカラー写真をスライドに作製し、途上国での開発援助の必要性を積極的に啓蒙したい。更に国際理解教育を一層前進させるためにJICA関西支部との連絡を深め、海外事情、国際情勢の実態的把握に努めたい。

4．所感及び意見

1）研修時期及び期間

現行の17日程度の旅程を30日程度に延長し、視察範囲の拡大と内容の充実を図ること７／25頃～８／24頃が適当と思われる。

2）研修日程及び訪問先

途上国の未来像としての立場から、シンガポール、特にオーストラリア等を訪問先に加えることが重要で、日程延長のことと関連させて検討されるよう希望する。

3）その他（手続き・他）

①派遣教員の人選決定が遅れがちで夏休みの計画が立てにくく、精神的準備が遅れる傾向があり、早期の決定を希望する。

②資料整理の自由勉強時間の確保を充分配慮して欲しい。各国訪問先でのおみやげ買いで少し自由時間が失われがちである。

5．その他（御意見があれば）

①派遣研修視察団の構成について

派遣教員の多数が農業高校に集中している現状を改善すること。

②全国的見地から、高海教（高国教）も農業高校等の独占体制から脱皮、開放されるべきで、多数を占める普通高校にも門戸を開放すべきであると考える。

③JICAの途上国援助のプロジェクトについて

フィリピンの首都マニラのスラム街を見て感じたのであるが、途上国の都市再開発は重要なテーマではないだろうか。

氏　名　喜安光男
所属学校　愛媛県立伊予農業高等学校
担当教科　農業

1．視察等に際して特に主眼を置いた点

1）JICAの国際協力の内容および実態を知ること。

2）各国の国情および生活・文化についての知識を高めること。

3）産業特に熱帯農業について知識を得ること。

2．国際協力の現場で

1）参考になった事
・優秀な専門家やJICAの調査員の方々が懸命に努力されている姿に感銘をうけた。

2）気になった事
・多額の予算をかけたプロジェクトが期限を完了し、専門家がいなくなってから、現地で十分生かされるかどうか、カウンターパート等の十分な育成が望まれる。

3）我が国の協力振りを各方面に紹介すべきだと考えられるプロジェクト

a)プロジェクト名
フィリピン熱帯医学研究所プロジェクト

b)その理由
フィリピンの死因順位を見ると生活の貧困によるもの、伝染病予防体制の不十分さ、医療施設・体制の不備が原因していることが一目瞭然である。下流階級の人の医療施設としてのこのプロジェクトを各方面に紹介し、援助予算も増額すべきである。

3．今後の教育指導に生かす具体的方策、もしくは材料として考えていること

(1)JICAの組織や活動および青年海外協力隊について理解させる。
(2)わが国の国際協力の実態を理解させる。

(3)四か国の産業・教育・文化についてその概要を理解させる。

上記のことについて国際教育研究協議会の各種の会合でとりあげたい。

4．所感及び意見

1）研修時期及び期間

夏休みに入って1週間後で学校の業務も片付けて参加でき、時期・期間とも適当である。

2）研修日程及び訪問先

日程、訪問先とも適当である。特に協力隊員現場視察は有意義だった。

3）その他（手続き・他）

事前研修を含めた日程表を早く送付していただきたい。県教委等への届出に必要です。

5．その他（御意見があれば）

・同行していただいた熊倉さん、各国のJICA事務所の方々には大変お世話になりました。重要な仕事を遂行されているJICAの方々の活動に深い感銘をうけました。

<中南米班>

日　　程

期　　日	訪　　問　　先
7月28日	パチャカマ遺跡
7月29日	JICAペルー事務所、インカ学園、 ワラル移住地
7月30日	JICAペルー事務所、国際じゃがいもセンター、日秘会館 水産加工センター、天野博物館
7月31日	ストのため航空機のフライトなし
8月1日	JICAペルー事務所、サル精神病院、黄金博物館
8月2日	移民資料館、国立博物館、
8月3日	サンパウロへ移動
8月4日	JICAサンパウロ事務所、ジャカレイ移住地
8月5日	サンパウロ中央青果市場、毒蛇研究所、サンパウロ美術館 サンパウロ日本総領事館
8月6日	サンパウロ州技術研究所、荒木農園
8月7日	イグアスへ移動、イグアスの滝
8月8日	JICAイグアス事業所、（診療所、日本人会、農協） 西語学校、日語学校、パラグアイ農業総合試験場 公文牧場、関農場、深見農場、イタイプ発電所
8月9日	アスンシオンへ移動、JICAアスンシオン事務所、
8月10日	金沢農場
8月11日	中央食品卸売市場、厚生省中央研究所、 リオ・デ・ジャネイロへ移動
8月12日	JICAリオ・デ・ジャネイロ事務所、フニシャル移住地
8月13日	帰路へ

氏　名　宮田智子
所属学校　東京都立園芸高等学校
担当教科　英語

1．視察等に際して特に主眼を置いた点

1）日本はその経済力に比して国際社会の中でになうべき、途上国への援助等の責任分担が少ないという批判があるが、その点はどうなのか。

2）南米諸国の文化理解および南米の人々の日本に対する、また現地日系人および日系社会に対する見方について知ること。

3）日本から新天地を求めて出て来た日系移民の人々の彼の地での現在までの生活ぶりと今後の展望について。

2．国際協力の現場で

1）参考になった事
お金は出すけれどとかく人は出し惜しむという批判を受けていた日本の援助の姿勢であるがごく最近のプロジェクト型援助については（アスンシオン中央食品卸売市場等）なかなかりっぱな活動を行なっていると思った。

2）気になった事
りっぱなプロジェクト援助を行ないながら、施設と機材を残したまま、一定期間をすぎると専門家引き揚げの形をとって、現地人への運営等の移行を行なうが、受け入れ体勢が充分にととのわない内に（最終的には被援助国の自立をまたなければならないのはわかるが）それがなされると、莫大な資金をかけて調達したものすべてが、ほこりをかぶることになるのではないかという危惧が、どのプロジェクトを紹介された後にも残った。

3）我が国の協力振りを各方面に紹介すべきだと考えられるプロジェクト

a)プロジェクト名
パラグアイ　アスンシオン中央食品卸売市場

b)その理由

食品の流通組織がまったく整わない当該国において組織の礎を作った。しかし、このプロジェクトにしても他のもの同様、専門家が撤退した後に不安が残る点は否めない。

3．今後の教育指導に生かす具体的方策、もしくは材料として考えていること

・全校生徒を対象とする帰国報告会（スライドを上映しながら実施の予定）

・各授業の中で、南米あるいは移住者に関する教材を取り上げる。その際には積極的に見聞したことがらに触れてゆきたい。

・11月に行なわれる学園祭で研修旅行中に入手することのできた資料の展示と発表。

・学校編集の研究紀要に報告文を記載。

・学校図書館の南米および移住に関する書籍の充実をはかる。（南米に関する書籍は限定出版のものが多いということがわかったので、一般書店では手に入りにくいものからも良いものを選んでそろえたい。）

4．所感及び意見

1）研修時期及び期間

時期については現状でよい。但し、各訪問先での訪問期間については、もう少し延ばすか、訪問先を絞ってほしい。ややかけ足訪問だったという印象をもっている。

2）研修日程及び訪問先

最初の訪問地ペルーは7／28，29 が独立祭にあたっており視察もままならない。各施設の訪問には独立祭にぶつからない方がより有効に時間が使えると思う。

3）その他（手続き・他）

・出来るだけ研修派遣の決定を早い時期に行ってほしい。語学研修、訪問先の下調べなど、もう少し時間をかけて行なえば研修旅行もより有意義なものになったと思う。

・パラグアイの事務所からの要望：イグアス→アスンシオン移動は飛行機ではなくバスの方が、いっそうパラグアイの地勢理解ができるのでは。請検討。

5．その他（御意見があれば）

・南米におけるJICAの活動ならびに日系移民（一部の）の現状についてはある程度理解できたと思う。ただしJICAの活動対象となっている国の人々の要望や、そのＰｒｏｊｅｃｔをどのように受けとめているのか、また今後は何を期待しているのか、そういった点については現地の人々との交流の場が与えられなかったので十分な理解はできなかった。日本人に案内されて、日系社

会だけを訪問し、日本語だけで通すことのできる旅というのはどうしても一面的な理解しかもたらさないのではないだろうか。

日系移民の訪問に際しても小1時間の農場案内と説明では、表面的なものにとどまろう。旅の日程の内、1晩くらいは日系農家にお世話になってゆっくり話を聞きたいという要望もでていた。また成功した方ばかりの話を聞いていたのでは日系移民の一面しか知ることができないとも思う。ただし日程上の問題の他、これには相手の方の都合もあれば、難しい点も多いと思われる。今回の旅行はこれまであまり関心のなかった南米に目を向け南米における日本および日系人の生活を知る上で大いに勉強になったと感謝していますが、今後の研修旅行のあり方として様々な面からのアプローチを試みていただければと思い、参考までに記します。

氏　　名　　鈴 木 吉 重
所属学校　　福島県立東白川農商高等学校
担当教科　　社会科

1．視察等に際して特に主眼を置いた点

1）JICAの行っているプロジェクトの内容と役割を把握すること。

2）移住地の生活実態をとらえ、移住者の生の声を聞くこと。

3）国際理解の重要性と教育の使命を結合させること。

2．国際協力の現場で

1）参考になった事

政治、経済、社会、文化制度の異った国での生活の困難さと、それに適応できるための自己の確立を教育の中で実践していかなくてはならないことを痛感した。

2）気になった事

日本の協力が今後も継続されると思いますが、その引き継ぎと私たちの異文化理解がどこまですれば良いかということ。

3）我が国の協力振りを各方面に紹介すべきだと考えられるプロジェクト

a)プロジェクト名

ペルー国リマ市の水産加工センター

b)その理由

漁業資源の多角的有効利用と国民生活の栄養改善に取りくんでいる点で注目された。

3．今後の教育指導に生かす具体的方策、もしくは材料として考えていること

各プロジェクトを通して相手国の生活向上に貢献していることを文化祭等で教える。移住地における日系人の活動をダイジェスト版新聞により（その中で移住された人々の話を折りまぜながら）教育活動の中で紹介する。

4．所感及び意見

1）研修時期及び期間

7／27～29　事前研修（語学研修）

7／29～8／17 中南米

今年度と同じ期間で良いと思いますが、時期は遅くした方が良いと思います。

2）研修日程及び訪問先

訪問国は3カ国ぐらいで、訪問先も各2カ所ぐらいが適切であると思われる。ペルーの場合、独立祭の時期をさけるべきと考える。アルゼンチンも入れて欲しい。

3）その他（手続き・他）

初心者でも使える簡単なスペイン語、ポルトガル語のテキストと事前講習会をやっていただきたいと思う。

5．その他（御意見があれば）

青年海外協力隊、日本語学校、移住地の人々といっしょに会食し、素直な話を聞かれた方が良いと思います。

氏　名　佐堂　博
所属学校　島根県立津和野高等学校
担当教科　英語

1．視察等に際して特に主眼を置いた点

1）各国農業移住地における栽培作物とその規模の実態について。

2）各国におけるプロジェクトの内容とその実態について。

3）各国におけるJICA事務所の業務内容の実態について。

2．国際協力の現場で

1）参考になった事

各国の要請に応じて有償・無償を問はずプロジェクトとして日本が開発途上国に対して国際協力をしている現実を目のあたりにし、世界の中の日本ということを実感致しました。またそこで熱心に活動されている専門家の方々のバイタリティにいたく感動し是非ともこの現実を高校生諸君に伝えてやりたいと思いました。

2）気になった事

ある国に対して多額の国際協力をしているがゆえに我が国が当該国に無理おしをしてこれがまかり通ることがあっては決っしてならない。当該国の主権は犯すべからざることはいつも念頭におくべきであること。思いよりは厳に慎しむべきであること。

3）我が国の協力振りを各方面に紹介すべきだと考えられるプロジェクト

a)プロジェクト名

パラグアイ国厚生省中央研究所プロジェクト（LACIMET）

b)その理由

一般国民の保険医療に対する意識が非らずしも高くない周辺地域を有する国において、衛生観念の向上に寄与することは健康で文化的生活を営むうえでかけがえのないプロジェクトであると思われる。

3．今後の教育指導に生かす具体的方策、もしくは材料として考えていること

島根県（公立36校加盟）国際教育研究協議会主催の高校生講座、同研究大会、校内学園祭等々を通じてスライド、写真展示、文書等をもって広くアピールしたいと思っている。また日常の授業のあいまあいまに我が国の行なっている国際協力について、是非話してやりたいと思っている。

4．所感および意見

1）研修時期及び期間

個人的には非常に適当であると考えます。ただ今回リマにおいて7月27日が日曜日であった事、それに続いて28日、29日の両日が独立祭（祝日）であった為、行動の面にやや難点を感じました。

2）研修日程及び訪問先

基本的によろしいと思われます。ただ20日間、いわゆる土・日に相当するものがないので、ハードな一面があります。若干のフリータイムを設定するのも一つの方法かと考えます。（今回特に事前研修を実施していただきたき心構えを十分持って研修に出発でき有意義でした。）

3）その他（手続き・他）

航空券のリコンファメーション等取り越し苦労を致しましたが、各国JICA事務所の方でこれをやっていただき非常に有難うございました。行動面においてお蔭様で何ら心配なく研修ができました。夕方の会食については気を使っていただかない方がよろしいかと思いました。

5．その他（御意見があれば）

非常に綿密な計画と暖かい御指導により大過なく、稔り多い研修をして帰国できました。イグアスからアスンシオンへは飛行機の遅れ等考えればバスで移動するのも一つの方法でないかと考えます。現在念頭にありますことは一日も早くまたできるだけ多く、この研修の成果を高校生諸君に還元してやりたいということであります。

氏　名　村田正彦
所属学校　長崎県立西彼農業高校
担当教科　理科

1．視察等に際して特に主眼を置いた点

1）国際協力の現状と問題点（技術協力プロジェクトの現状を中心に）

2）日本人移住地の現況（後継者問題と二世、三世の教育問題を中心に）

3）青年海外協力隊員、専門家の活動の状況

2．国際協力の現場で

1）参考になった事

・国際協力の場においては、知らないもの同志では協力は成り立たない。相手を知る事なく援助だ協力だと言っても、これは物質的な援助にしかならず「与えてやる」という思い上がりにしかならない。真の国際協力は金や物質を与える事だけでなく心と信頼をうることから始まる事が理解できた。
・青年海外協力隊員が途上国の国づくりのために献身的な協力をしていたのが心に残った。またJICAの名が途上国でよく浸透していた。

2）気になった事

・訪れた国々では、国土の開発に懸命で自然の破壊や、自然の調和にまで目が向いていなかった。
・日系の移住者とヨーロッパ系の移住者の移住に対する（人生感）考え方のちがい。
・懸命に努力していた青年海外協力隊員の帰国後の再就職問題。
・移住地の農業後継者問題。
・訪れた各国は、自国の現実より輸出して金を稼げる産業の育成を希望しているように感じた。

3）我が国の協力振りを各方面に紹介すべきだと考えられるプロジェクト

a)プロジェクト名
サンパウロ州技術研究所

b)その理由

JICAが当研究所におこなったプロジェクトの歴史も古く、ブラジルの産業を発展させるために重要な公共的な基礎開発事業を19部門にわたって実施している。今後も当研究所の業務については引き続きJICAからの専門家の派遣、機材供与、研修員の受け入れ等が継続的に必要と思われる。ブラジルには多くの資源が未開発のままである。そのため研究所の試験研究を継続的にまた広範囲に実施し、研究開発をおこない産業を育成する事によって輸入を減らし輸出を伸張し、債務の解決を図るのを援助すべきであると考えるから。

3．今後の教育指導に生かす具体的方策、もしくは材料として考えていること

・理科の授業の中に今回の研修で得た知識を撮影したスライドを用いて教科指導をしたいと計画している。（開発と自然の平衡、自然の破壊、砂漠化、土地の塩地化）
・クラブ活動、学年指導、全体指導の場において開発途上国の人々が如何に一生懸命生きているか、日本人には考えられない苦労をしているか（貧富の差、自然事象、人文的事情等）――国際理解について生徒に話したいと考えている。また、今の日本の若者の生き方として、平和で豊か過ぎて警戒心も薄く、食料の大部分を輸入に頼っていながら飽食に明け暮れる日本人で良いのか、飢えと貧困から解放された日本人が低開発国に何をしなければならないか（若い技術者の海外進出）考えさせてみたい。――国際協力

4．所感および意見

1）研修時期及び期間

教員としての立場上この時期しか海外研修はできない。

2）研修日程及び訪問先

今回は予想されなかった航空機会社のストのため三ケ国をゆっくり視察する事ができました。ペルーには六泊しましたが、二．三泊の滞在でしたら私達は誤ったペルーの印象を抱いて帰国しただろうと話し合ったほどです。サンパウロにも四泊でき良い研修ができました。二泊づつで多くの地を視察するより良い方法かもしれません。

3）その他（手続き・他）

・ストを行ったロイド航空は南米ではストで有名だそうです。今後は計画の段階で現地の事務所の意見を聞かれる事を希望したい。
・ペルーに着きましたら独立祭で店も全て休みでした。独立祭のときのペルー訪問は一考を要します。

5．その他（御意見があれば）

・最近高校の社会科で世界史を学ぶ生徒が減少しています。それは大学入試で点数が取りにくいということに大きい原因があるようです。しかし今回私達が研修で三カ国回ってみて感じた事は、その国と住んでいる人々を理解するためにはどうしてもその国の歴史を知らないと理解が十分でないことです。このことは臨教審でも取り上げられているところです。国際社会に生きねばならない日本の若者に世界史を学ばせる必要があると考えています。

・JICAの広報活動について意見を言わせて頂きます。

JICAは営利事業ではありませんので必要は無いと思われるかもしれませんが、私達の周囲ではJICAの名前と活動を知っているひとは数少ない現状です。しかしながら私達が訪れた国ではJICAというと多くの人が、その誠実な活動を知っていました。確かにJICAでは多くの16ミリ映画を制作しておられます。しかし日本での現実の社会生活で16ミリ映画を見る機会を持つことができる人は限られております。そこで国民的支援のもとにJICAの活動が益々発展する事を願うものとして、テレビで「JICAアワー」を放映しては如何でしょう。「兼高かおるの世界の旅」という番組が日本では根強い人気を持ち日曜日の朝の人気番組として十数年続いています。このことからも日本の人々は異国の自然と人々の生活を知りたがっています。

世はTV時代です。私もささやかではありますがTV番組を作りまして、父兄の学校教育の理解や、生徒募集、教科指導に役立てています。数多く語り、活字にし印刷する事よりTVメディアの効果はバツグンです。たとえば、青年海外協力隊員の活動の様子をメインにして、隊員と現地の人とのからみ、さらに現地の自然をからませると数多くの番組が制作できると思います。このような番組を、日本で目標をうしなった若者に視聴させることにより、若者は先進地の観光旅行では得られなかった他国を知ることになり、ここから国際理解がはじまり、この仕事であれば自分にもできると考えるようになれば、これが国際協力につながっていくようにおもわれます。

・現地で協力隊員の方も専門家の方もお互いの意見交換の場がほしいと希望されていました。青年海外協力隊員と専門家の方々の話し合いの場をもうけてほしい。

・来年度の海外研修の参考に

パラグアイ国の研修はイグアスからアスンシオンへの移動は航空機よりバスを利用した方が良いようです。時間的にも変りません。移住者の国別による差がよく理解できます。

JICA